

「コロニアル・ア フリカ」と 「帝国の遺産」 の再考

二〇世紀世界史の省察

特集にあたって

かつて、テレンス・レンジャーは、「どれほどアフリカ史は実際にアフリカ的になったのか、また、西欧の歴史研究から生まれた方法や問題関心はたしてアフリカ史を研究したり、語ったりするための十分な手段となるのか」と問うたことがあった。アフリカ史研究は、最近二〇年間、アフリカニストの研究によって開花し、多岐の分野にまたがる新しい領域を切り開きつつあるにもかかわらず、レンジャーの疑問を葬り去るにはまだ躊躇するところがあるように思われる。

それというのも、アフリカ史研究において最も生産的で、最も評価の高い成果が、アフリカではなく、アフリカ以外のところであげられているという印象を容易に払拭しえないからである。この矛盾を最も切実に感じているのは、当のアフリカ人研究者たちではないだろうか。この問題の解決策の一つがアフリカ内部の高等教育制度を充実させていくことにあるという点で、心ある人々の意見は一致している。「アフリカ史のアフリカ化」

あるいは「アフリカの創造的表現」をめざして、アフリカ史の研究を「もっとアフリカ的」にする努力、すなわちアフリカ史の再考と書き直しが求められることを否定する人は誰もいないだろう。

この重要な課題を考える契機として、また、アフリカ史研究の新機軸を開くスプリングボードとなるべく、本小特集では、一つのテーマとして「植民地支配下のアフリカ」を書くとはどういうことなのかを多面的に考察することを選択した。

ところで、アフリカ史の記述が主体的にアフリカ化していくことをめざすのであれば、帝国史の記述は、レンジャーの言説のアナロジーでいえば、時代を遡るほど帝國的であり、時代が下るほどその帝國的色彩が薄れて、今日の研究状況が醸成されてきたと理解するのが適当なのであろうか。あるいは、明示的には帝国史研究の帝國性が減退しているようにみえながら、黙示的には、あるいは帝国史研究の深層においてはそれが持続している、否、見方によれば逆に昂進していると考えるのが適当なのであろうか。現在進行中の「新帝國主義」をめぐる議論を考えれば、帝国史の再考もま

たきわめて重要な今日的課題であらう。本小特集の今ひとつのテーマとして「今、なぜ帝國を語るのか」、「帝國の遺産」とどのように向き合い、それを語り、書き記すことが、帝国史研究、広くは歴史研究に前進をもたらすのか、を考えることを選択した。

この小特集では、以上に述べた問題意識のもとで、具体的には、二〇〇四年六月と一二月の国際ワークショップに提出された諸論文を編集し、二〇世紀という時代への理解を深めたいというねらいもある。考えてみれば、二〇世紀は、世界史に戦争と殺戮の記憶が刻み込まれた世紀であった。

文化や芸術、経済や社会、科学、医学および技術、政治やイデオロギー、人種、階級および性の関係、人口構成、環境や疫学、認識的・理論的な表現システムなど、どれ一つをとらあげても、二〇世紀は、人間の経験のすべての領域において、巨大で複雑で、矛盾した変化によって特徴づけられるであらう。

二〇世紀は、「ヤヌスの顔」をした世紀でもあった。ユートピア的理想主義に率いられた大衆の

ナショナリズムと反乱の時代のなかで到来を告げた二〇世紀は、地球規模における大量生産、大量流通、大量消費、大量レジャーの頂点をみせた。

その一方で、二〇世紀は、大衆ヒステリア、大量殺人、大衆の抑圧、大量の貧困、大量死をともしう病いの一世紀でもあった。科学・技術の発達、経済的繁栄と人口増加、近代化とグローバル化を経験した前代未聞のこの世紀は、また、地球規模の戦闘やジェノサイド、社会的・地政的な妥協の余地のない分断、大量の人口増加と移動による混乱、民族間の対立、人種的・党派的・宗教的ショービニズム、多様な現れ方をする植民地主義・権威主義・全体主義の世紀であった。民族解放を求め、階級とジェンダーの平等を求め、市民権や人権を求めた運動によって得られた勝利にもかかわらず、二〇世紀は、富めるものと貧しいものあいだ、また諸民族間のギャップが依然として開きつつある状態のなかで幕を閉じた。

新世紀の入り口に立って、帝国とアフリカの邂逅の世紀を振り返ってみるとき、その本質をどのようなものとして理解するのが適当なのであろう

か。勝利か悲劇か、熱情あふれる成就の宣言か悲しみに満ちた挫折か。アフリカ大陸の人口と政体、社会と国家、精神と文化、経済とエコロジーは、二〇世紀に生じた事態の変化によってどのような影響されたのか。逆にアフリカは、二〇世紀という時代にどのような影響を与えてきたのであろうか。

本共同研究では、アフリカ内で、アフリカと他の世界とのあいだで生じた政治、経済、社会、文化、芸術、環境などの多様な事態の展開とその諸関係を形成するうえで作用したグローバルな諸要因と現地の諸要因の位置関係をサーベイしようとしてきた。その際、共同研究に参加した一人一人は、アフリカとかつての帝国に暮らしてきた普通の人々が、変化の諸要因に対応し、それを緩和し、それを自らの力で方向づけるように生きてきたことに配慮することを決して忘れなかったことを付言しておきたい。人々の日々の営みをいかに記述すれば、何をどこまで記述すれば、アフリカとそこに暮らす人々（そしてアフリカ経験をもつ非アフリカ人たち）を語ったことになるのか——この問

題意識こそ、本共同研究と本特集を根底で支えていたものである。

(井野瀬久美恵、北川勝彦)

一 国際ワークショップ

「アフリカ史研究の回顧と展望」

本国際ワークショップは、二〇〇四年六月二六日に、国立民族学博物館において「アフリカ史研究の回顧と展望」と題して開催された。報告者は、アメリカ合衆国のペンシルベニア州立大学教授ポール・ティヤンベ・ゼレザ氏とジンバブウェ共和国のミッドランド州立大学教授ヌグワビ・ムルンゲ・ベベ氏であった。両氏の報告に対するコメントーターとしては、ジンバブウェ史の専門家である専修大学教授の吉國恒雄氏と東アフリカ経済史の専門家として広く知られている日本福祉大学大学院教授の吉田昌夫氏をお招きした。

報告に先立ち、司会・進行を務めた北川からこのワークショップを開催するにいたった経緯を次のように説明した。

国立民族学博物館の地域研究企画交流センター

では、すでに一九九九年一月に栗本英世氏(大阪大学大学院教授)によって「アフリカを書き換える——再生か崩壊か」と題する国際シンポジウムが開催された。また、二〇〇二年一〇月には、富永智津子氏(宮城学院女子大学教授)を中心に「アフリカ史再考——女性・ジェンダー研究の地平から」と題する国際シンポジウムが開催されてきた。この国際ワークショップは、以上の国際シンポジウムで切り開かれてきたアフリカ史研究のいつそうの進展を期待して開催されたものである。

この国際ワークショップを開催する母体となった共同研究は、二〇〇二年に始められた。この共同研究は、国立民族学博物館に収蔵されている「英国議会資料」を利用してアフリカの植民地における政治・経済・社会・文化の諸相について多面的な歴史分析を試みることを目的としていた。各共同研究員は、各自が積み重ねてきたそれぞれの研究と関連させながら、アフリカ史のなかで帝国史とのかかわりが問われる地域、あるいは個別テーマを設定し、各自の研究・調査を深める。そ

れとともに、設定した地域やテーマが「英国議会資料」のなかでどのように記録・記載され、議論されてきたかを調査し、そうした記録のあり方や記載内容、議論のあり方と関連する他の諸資料をも加えることによって、「英国議会資料」を利用すれば何をどのように語りなおすことができるのかを模索し、互いに活発な議論を重ねてきた。この国際ワークショップには、これまでの共同研究で議論されてきた諸問題がアフリカ史の国際的な研究動向のなかでどのような位置にあるかを確かめ、試みてきた資料研究の方法論や方向性が妥当なものであったかを検証し、二〇世紀アフリカ史研究に新たな展望を得るところにねらいがあった。以下では、当日、出席してくださった吉田、吉國両氏からいただいた実に刺激的なコメントとフロアから提起された問題をふまえて議論を整理しておく（吉田、吉國の両氏は本小特集のためにコメント原稿を提出して下さったのであるが、紙幅の関係で原稿をそのままの形で掲載できなかった）。

この国際ワークショップでは、アフリカの近代史を議論するうえで卓越した著作を数多く公刊し

てきたゼレザ氏とベベ氏の高見を直接伺うことができたことは参加者一同にとって幸いであった。

ゼレザ氏は、コロナリズムに関する歴史研究を省察するにあたって、過去四〇年間にどのようなアフリカ史家の視点が変化してきたか、についての特徴と代表的な歴史家に焦点をしばらくながら、幅広いサーベイにもとづく報告を行った。「アフリカ史を専門としている者にも、帝国史を専門にしている者にも、アフリカにおけるコロナリズム研究の推移を追ってゆくための格好の筋道を提示した報告であった」と吉田氏は語っている。ベベ氏の報告は、「ジンバブウェにおいて一九七〇年代から開花したアフリカ史研究の黄金時代的をしほり、ナシヨナリスト・ヒストリアンと呼ばれる視点をもつ歴史家たちによって新しい方法が用いられ、多くの論文や歴史書が書かれていった過程と最後の展開を、その内部にいた者のもつ知見を駆使して論じた興味深い報告」であった（吉田、吉國両氏のコメント）。

ゼレザ氏の報告で示されたように、アフリカのコロナリズム研究を四つのパラダイム——帝国

主義史観、ナシヨナリスト史観、ラディカル史観、ポストコロニアル史観——によって捉える考え方は、広くアフリカ史家に受け入れられているものである。まず、帝国主義史観に関するコメントのなかで、吉田氏は「この視点は、日本が朝鮮を植民地化し、併合したことに對する言い訳として提示される見方とそっくりである」と語り、ゼレザ氏は討論のなかで、比較史研究に道を開く興味深い問題提起であると発言した。

次に、ゼレザ氏は、「ナシヨナリスト／アフリカニスト史観では、コロニアリズムは長い歴史のなかの短いエピソードにすぎず、アフリカの文化や社会はほとんど変化しなかった」と捉えられていると論じた。これに對して、吉田氏は、「ナシヨナリスト／アフリカニスト史観の歴史家すべてが、そのような位置づけをしたわけではなく、ナシヨナリストの歴史家でもコロニアル期が重要な影響を永続的に与えたとする見解をもち、それへの對抗運動としての諸勢力の分析を（歴史研究の）中心的課題として打ち出している学者が多数いる」と指摘した。また、「アフリカの植民地史は、

インドとか西インド諸島などの歴史との関係において、どのように位置づけられるか」という疑問が提示された。これについてゼレザ氏は、「アフリカ史研究には言語上の問題があり、研究者の交流は英語圏、フランス語圏と別々に完結していたが、それを打ち破ったのが、ユネスコのアフリカ史プロジェクトであった」という見解を示した。これは、アフリカ史をグローバルな視野で考察する重要性が指摘されたものと理解される。

ポストコロニアル史観では、歴史のエイジェンシーの多様性あるいは多義性の分析が特徴となっており、それが冷戦終結後という新しい時代に對応して興隆した史観であるために、フロアからの議論も集中した。

ゼレザ氏は、近年のポストコロニアル研究の成果に照らして考え、コロニアリズムが一枚岩的であるという前提や植民地を支配する側と支配される側に分ける二分法への疑問を提示した。アフリカ史研究において、両者の内部にもまた両者の関係にも複雑で不安定な側面があったことに注目し、文化的な位置関係やアイデンティティなどが交錯

する過程の諸変化に自らが注目していると論じた。また、同氏は、近年のアフリカ史研究の方法として文書類や口承伝承に限定せず、衣服、行動様式および社会慣行などの記述に依拠することも多くなってきたと指摘した。このようにポストコロニアルへのアプローチでは、これまで無視されてきた重要な論点、すなわちセクシュアリティ、精神、言語がとりあげられるようになり、歴史の広がりや奥行きが増すとともに小さな地域の歴史に凝縮された多様性も議論されるようになった。

それに加えて、ゼレザ氏は、ポストコロニアルなアプローチには、社会のダイナミクス、階級、ジェンダー、環境などが重要課題となっている点、また、アフリカ史においてしばしばとりあげられてきた「抵抗」についても、大文字のRを使ってそれを描くよりもむしろ小文字のrを使い、「抵抗」をめぐる複雑な状態、男性あるいは女性のアイデンティティがどのように変わっていくのか、というようなことを書くようになったと語った。これに関連して、フロアからは「女性の視点をどう入れていくか」、「女性のアプローチにたった歴

史を書きうるか」という問いも発せられた。

次いで、ベベ氏は、「ジンバブウェにおける歴史研究の黄金時代とその現在の衰退」について報告した。同氏は「一九七〇年を境に、ジンバブウェにおける歴史研究が興隆の日々を迎えた」と述べた。すなわち、テレンス・レンジャーに代表されるナシヨナリスト史観は、植民地宗主国のイギリスに対して独立戦争を闘っていたナシヨナリストたちに大きな影響を与え、アフリカニスト／ナシヨナリスト史観の研究では、アフリカ人たちの活動、適応、選択、イニシアティブを主題とした研究が進められていった。また、ラディカル史観のマルクス主義者は、ナシヨナリスト史観の弱点でもあり、それまで軽視されてきた階級形成と階級闘争を焦点としてとりあげた。ベベ氏によれば、アフリカニスト側はナシヨナリストを一枚岩と見なし、ラディカル側は人種、ナシヨナリズム、エスニシティ、ジェンダーのような社会・政治上の重要なカテゴリーに彼らの知見をもたらさなかったと批判した。ところで、ベベ氏は、レンジャーの研究では農村の不満の高まりをテーマとしてい

たが、都市のナシヨナリズムは一樣なものとして理解されるといふ欠陥があったと批判している。この欠点を打破した吉國恒雄氏のジンバブウェ都市社会史に関する一群の研究は高く評価された。

ベベ氏によると、このようなジンバブウェにおけるアフリカ史研究の黄金時代も、近年、衰退が顕著となった。それは、大学のスタッフの高齢化、世界的経済危機のジンバブウェへの衝撃、国際レベルの研究者の喪失、ジンバブウェの若手研究者の頭脳流出のためであった（この小特集では、諸般の事情のためにベベ氏の論文を掲載できなかったが、吉田、吉國両氏のコメントを含めて他日を期したい）。

（北川勝彦）

二 国際ワークショップ

「帝国の遺産」——大英帝国と大日本帝国

引きつづき、二〇〇四年二月一九日には、やはり国立民族博物館にて、「なぜ今帝国を語るのか——その文化的遺産の分析から」と題するワークショップを開催した。報告者は、リーズ大学歴

史学部教授アンドリユー・トムスン氏、ならびに日本女子大学教授・成田龍一氏であり、各報告に対するコメントは、展示表象論の専門家である川口幸也氏（国立民族学博物館）、日本植民地期を含む近代日本語史の専門家である安田敏朗氏（二橋大学大学院）にお願いした。

報告に先立ち、司会・進行を務めた井野瀬から、「帝国の遺産」をテーマにワークショップを立ち上げた背後の問題意識を次のように説明した。

「九・一一」アメリカ同時多発テロを一つの契機として、あるいはアフガニスタンやイラクにおける「戦争と戦後」の混乱状況やその意味をめぐって揺れつづける国際情勢のなかで、「帝国」という言葉が注目されて久しい。「帝国」とは何だったのか、それは現代世界とどのようにかわっているのか——これらの問いが、歴史学のみならず、政治学や社会学、文学批評といったさまざまな領域で繰り返されることによって、その解釈の多様性もまた浮き彫りにされるようになった。イギリス近現代史や大英帝国史とアフリカ史との対話ともいえる共同研究「二〇世紀初頭の大英帝国

と「アフリカ」では、大英帝国の全盛期にあたる二〇世紀初頭、この帝国空間がアフリカを抱えるようになった意味を考えることを課題の一つとしてきたが、こうしたポスト冷戦の世界情勢に鑑みて、本ワークショップでは、現代イギリスの多様な分野でよみがえった「帝国」への強い関心を議論の俎上に上げることにした。二一世紀初頭の現在、誰が、なぜ、どのような状況によって、帝国（ないし帝国史）を語りたがる、あるいは帝国を語ることを必要としているのだろうか。

この問題を、文化的な「帝国の遺産」をキーワードに再考すること——これが、二つの報告の主たる目的である。アンドリュー・トムスン報告では、アフリカというコンテクストを含めて、脱植民地化のプロセスにみられるイギリス人の帝国意識をあぶりだしながら、大英帝国の文化的な「遺産」がどのように表現され、現代イギリス社会に継承されたのかを分析している。それを、大日本帝国の事例を扱った成田龍一報告と合わせ鏡にすることで、「帝国」という歴史空間が残したもの」について新たな知見を得るとともに、誰がなぜ、

どういう意味で今「帝国を語ることを必要としているのか」という、より大きな問題へ、さらには、「帝国を語ることを」がもつ可能性についても、議論を深めていきたいと考えた。

各報告、ならびにコメンテーターの見解については、以下の原稿をお読みいただくことにして、ここでは、二つの報告を受けて行われた議論に関して、若干の解説を加えておきたい。

アンドリュー・トムスン報告では、もっぱら以下の三点に議論が集中した。第一に、「帝国を語ることを促したものは、第二次世界大戦後のイギリス社会に大量に流入した旧植民地からの移民——いかなれば、可視化された「帝国のかたち」——の存在であったという点について。第二に、移民という非白人の存在によって多様化の度合いを深めたイギリス社会における「公共空間」として、博物館とそこの帝国関連の展示が果たす役割をめぐって。第三に、現代イギリス社会で「帝国を語ることを」につきまとう政治性——歴史の政治化の問題について、である。

例えば、「今のイギリスはなぜ帝国を語りたが

るのか」という問いに対して、トムスン氏は「イギリス人は、誇りと恥で構成されるモラル・パランスシートの上で、帝国を語ってきた」として、「九・一一」以降に強調された「大英帝国史の政治化」については一定の留保を求めた。それに対して、参加者からは、脱植民地化のなかでイギリス人が抱くようになったとしてトムスン氏があげた、帝国への疑義を示す事例が、きわめて選択的であること、それゆえに、そうした事例自体が、トムスン氏自身が有する「帝国的な心のありよう(imperial mind)」を示しているのではないか、という刺激的な疑問が提示された。また、大英帝国に対するイギリス人の関心の低さを示す例としてトムソン氏が提起したギャロップ社の世論調査とその読み方に対しても、「世論調査は世論を反映するのか、それとも世論をつくるのか」という意見が寄せられた。さらには、「帝国の遺産(imperial legacy)」という言葉にまわりつく負のイメージの有無についても質問が相次いだ。

とりわけ、問題提起者として興味深かったのは、脱植民地化のプロセスを引き合いに出しながら、帝国に対するイギリス人の関心の希薄さを主張したトムスン氏に対して、大日本帝国を例に成田龍一報告が突きつけた、ある問題意識とそれに対するトムスン氏の回答(正確には回答の不在)である。

成田氏は、「帝国的な心のありよう」とは、「他者」への想像力を弱体化させることである、という貴重な指摘を行った。氏の報告で取り上げられたいくつかの事例——例えば、小説によく使われる「野蛮を救う開明的な娘」という設定に隠された「他者＝野蛮」という見方、白磁に「怒りの美」ではなく「哀しみの美」を見たという柳宗悦(民族哲学者、美術研究者。日本民藝館の創設者として知られる民芸運動の主唱者)の発言と柳に内在した「保護されるべき他者」という意識など、成田氏は、一見そうはみえない「帝国意識のかたち」を鮮やかに指摘するとともに、そこに「他者」を想像する力を喪失させた「帝国意識」を捉えてみせた。「自己」にとつて、「他者」とは、そもそも居心地の悪いものであり、だからこそ、「共存」のあり方が問われる。しかしながら、「共存」が

きわめて難しいために、「他者」を勝手に想像、あるいは消去してしまうことが少なくなく、そのような局面にこそ、無意識に「帝國的な心のありよう」が反映されるのだと、成田氏は言う。

この成田氏の指摘に対して、トムスン氏からの直接的な回答はなかった。そして、回答がなかったこと自体が、「帝国を語ることをめぐる両氏の意識の違い、そして「帝国を語る」ということをめぐる（大英帝国と大日本帝国という）二つの帝国の差を物語っているといっているかもしれない。それは、帝国の支配Ⅱ被支配の構造や関係のありよう、帝国の「内」と「外」、そしてそれを分けるボーダーラインをどのように捉えるかをめぐる違いでもあり、帝国に「内」と「外」をもたらした力学の違いでもあろう。

実際、成田氏はもちろん、日本人参加者からも、「帝国の支配Ⅱ被支配の構造や関係」について、それはトムスン氏が語るように明解なものか否かをめぐって疑義が呈され、むしろ見えているように思われてきた支配Ⅱ被支配の関係性を疑い、見えにくくされている（かもしれない）「支配Ⅱ被支

配関係」を見えるようにする作業こそが必要ではないか、といった議論が交わされた。この作業を、成田氏は「帝国を脱臼させる」とよんでいるが、そこには、そのままでは「帝国だった過去」を語らない（ようにみえる）大日本帝国の歴史記述に對するいらだちがあるのかもしれない。実際、（今なお）たえず想起させられる「大英帝国という過去」と、（今となっては）主体的に想い起こすことのできない「大日本帝国という過去」とは、きわめて対照的な感を受ける。両者の違いをどう理解すればいいのだろうか。

さらには、コメンテーターの安田氏が指摘したように、言語の問題——すなわち、「帝国史」は何語で語るべきかという問題も重要である。例えば、イギリスの場合、帝国史の多くは、これまで、そして今なお、英語で書かれている。そこに旧植民地の人々が手にした英語という「帝国の遺産」をみる向きもあろう。しかしながら、見方を変えれば、帝国史が英語で書かれてきたために、「他者」との出会いにある種の限界がもたらされたこと——「他者」を想像する力の弱体化——も

看過できないだろう。では、帝国史とは、何語で、
どういった概念にしたがつて記述すればいいのか。
例えば、大日本帝国の歴史は何語で書くべきなの
か。

誰に向けて何をどう書けば「帝国」を語ったと
いうことができるのだろうか。近代ヨーロッパが、
抑圧的かつ無意識につくりあげた「他者」を、ヨ
ーロッパ近代をさほど抵抗もなく受容した日本が
どのように描き直すことができるのか。その意味
では、大日本帝国の書き換え作業のなかにこそ、
これまでとは異なる大英帝国史の可能性もみえて
くるかもしれない。

(井野瀬久美恵)